

2017年1-6月

20170208

慌ただしさに追われて、書き込むのが遅れてしまったが、5日（日曜日）に田中克彦自伝刊行記念パーティーがあった。田中克彦という人は、一部に熱狂的なファンを持つ、一種のカリスマ（昨今の日本で使われる安直な意味ではなく、語の本来の意味で）だが、私はそうしたファンたちのサークルには属さず、一定の距離をおきながら、つかず離れずの関係であり続けてきた。彼の研究も人柄も、強烈な癖があるために反感を呼びやすい面があるが、それが一種独自の個性でもある。今回刊行された自伝にしても、多くの知人について、相当差しさわりのあることを遠慮なく書いて、「こんなことを書いていいのか」という感想も浮かぶが、おそらく彼を直接知る人は、「田中の書くことだから、まあいいか」といって許してしまうところがあるような気がする。冒頭で故・加藤九祚に触れた箇所なども実に人を食った感じの記述だが、本書刊行の直前に亡くなった加藤さんも、おそらくあの世で「田中の奴、こんなことを書きおって」とつぶやきながら、ニコニコ笑っているのではなかろうか。

当日、会場に着くと、司会役の長縄光男さんが、「塩川さんもスピーチしてくださいよ」と言う。私は田中系に属していないからと言って辞退しようとしたら、「そういう人脈外の人さえも参加しているということが田中さんの幅広さを示すことになるのだから」と、説得されてしまった。記念される著作自体が差しさわりのある記述に満ちていることに悪乗りして、私も結構差しさわりのあるスピーチをしてしまったが、目の前にいる田中さんがニコニコしながら聞いてくれたのはありがたかった。

20170226

少し前のことになるが、神戸大学に出張した折り、行き帰りの電車の中で、遠藤乾『欧州複合危機』と宇野重規『保守主義とは何か』（ともに中公新書、2016年）を読んだ。遠藤著の本論部分は、私がこれまで皮相にしか知らなかった多くの重要事項に関する明快な解説であり、大いに有益だったが、本論よりも手前のところで一つの疑問を感じた。本書の冒頭近くに、EU〔およびNATO〕の東方拡大は東西分断がついに克服されるということの意味し、その時期のEUは順風満帆であるかに見えたという記述がある。こうした順調な時期の後に新たな危機が複合的に生じたというのが本論の中身だが、1990年代に「分断がついに克服」されたというのは本当だろうか？むしろ、「壁」を東にずらしただけで、新たな分断が再生産されたのではないだろうか。そういう「壁」の移動によって拡大されたヨーロッパは、その範囲内ではとりあえず順風満帆であるかに見えたが、それは各種の矛盾を新しい「壁」の外に追いやっただけとは言えないだろうか。そのつけが回ってきたのが、2014年のウクライナ危機、2015年の難民危機、そしてテロのヨーロッパ域内への波及だったという面があるのではないだろうか。もう一つの感想として、EUは複合的な危機をかかえつつも、しぶとく生き延びつつあり、解体の可能性をほらみつつも再編の道を探っているとのことだが、これはゴルバチョフ期のソ連を思い起こさせる。当時のソ連もまた複合的な危機をかかえていたが、民主的で分権的な同盟への再編を通してしぶとく生

き延びさせる可能性も探求されていた。その試みが潰えたのが 1991 年 12 月のソ連解体であり、それはまた、1989-90 年に期待されていた「欧州分断の克服」ではなく、「壁」を東にずらしただけの新たな分断の始まりでもあった。

宇野の著作は二通りの読み方ができるという気がした。一つは、よくできた政治思想史の教科書のうちの保守主義のパートだというものだが、もう一つは、現代的状況に向けられたメッセージの書というものである。後者の読み方に立って、やや強引に読み込むなら、古典的保守主義はパークやハイエクにみられるように含蓄と叡智に富んだものだったのに対し、現代の自称保守主義はそうした含蓄も叡智も欠いた単なる反動思想に傾斜しているという現状認識があるように感じられる。この指摘には共感することができるが、では含蓄と叡智を欠いた安っぽい保守（むしろ反動）思想が隆盛を極め、リベラリズムも古典的保守主義もやせ細っているという現状はどのようにして生じたのか、活路はどこにあるのか、という疑問が生じる。もちろん、この疑問への答えは著者だけに要求すべきものではなく、われわれみな考え続けていくべきものだろう。

20170311

「3. 11」の 6 周年の日だ。私の経験など、東北の方々がこうむった被害に比べれば微々たるものだが、とにかく記憶が失せてしまわないよう、ささやかながら一応の記録にとどめておく。あの日、私は東京の自宅にいた。それなりの揺れはあり、棚のものがいくつか落ちたが、それ以上の被害はなかった。もっとも、東京でも交通機関の麻痺はひどく、既に社会人になっていた二人の娘たちはどちらも出先で足止めを食らって、それぞれの職場に一泊してから帰ってきた。2、3 日後に大学に行ってみると、6 階にある研究室の揺れは相当大きかったらしく、本棚の書物や書類が床中に散乱していた。本棚を壁に固定していたボルトが吹っ飛んでいたのは驚いた。スチール製のカードボックスが床に落ちていたのを見たときは、もしこれが頭にぶつかったら一巻の終わりだったかもしれないと感じた。定年まであと 2 年という時期のことだったので、床に散乱した膨大な書籍や書類をゆっくりと丁寧に再整理するよりも、この機会にかなりの部分を処分してしまおうと考えて、あまりじっくり点検もせず次々といろいろなものを廃棄したが、それでも結構長い日数がかかった。一つ印象深いのは、たまたま一時帰国していたロシア人留学生（民族的にはカルムイク人）が、「いまの日本は放射能に汚染されていて、危険だろう」という周囲の忠告を押しきって再来日したこと。多くの外国人が脱出しつつある時期だったので、心意気に感激した。

20170318

大学院教育あるいは研究者養成ということについて。

私は自分の主観としては大学院教育に相当大きな精力を注ぎ、一生懸命やってきたつもりだが（正規に指導教官／指導教員として関わった人たちの他、インフォーマルな形で関わった人も、というか人数的にはむしろそういう人たちの方が多い）、振り返ってみると、それは相当風変わりな、無手勝流のものだった。

今頃こういうことを言っても遅ればせに過ぎるが、他の人たちのやり方を長年観察する中で、「通常のスタイル」はおよそこういうものではないかということの見当がついてきた

ように感じる。それをやや図式化してまとめるなら、(単純化のしすぎだという批判を受けるかもしれないが)、およそ以下のようなになるだろう。

第1に、当該ディシプリンにおいて古典と目されているものの中からいくつかを選んで、それらを読ませたり、解説したりする。その際、古典の解釈には多様なものがあり、論争もあるので、そうした点にもある程度触れるが、初歩の段階であり深入りすると学生が消化不良をおこすので、とりあえずは現在の学界でスタンダードと目されている解釈を身につけてもらうことに主眼を置く。

第2に、当該ディシプリンにおいて近年現われた新潮流のうち、特に目立つものをいくつか選んで、それらを読ませたり、要点を教えたりする。その際、それらの新潮流をどう受けとめるべきかについては種々の意見があり、論争もあるが、そうした点に過度に深入りすることは避け、とりあえずは現在の学界で比較的優勢と目される観点を知ってもらうようにする。

第3に、当該ディシプリンにおいて現在注目度が高く、かつ研究の手がかりがあって調べやすい研究テーマをいくつか例示し、それらのうちからどれかを選ばせる(場合によっては、教師が一つに絞り、それを与える)。大学院生は、第1と第2で得た知識を分析枠組みとして利用しながらそのテーマに取り組むことが期待される。

このようにして大学院生が古典と新潮流の双方について一応の基礎知識を獲得し、かつそれを自己流に活用する経験も一応積んだという地点に到達するなら、それでもって「一人前」という認定を受ける。もちろん、これはあくまでも最初のステップに過ぎず、それだけでは不足の部分も多いが、そうした点についてはその後の研鑽の中で補っていくことが期待される。

一応こういう風に考えられるとして、私の場合について振り返ってみると、そもそも自分がどういうディシプリンに属しているのかという自己意識が不確定であり、そのため雑多な分野の文献を新旧取り混ぜ、非系統的に乱読してきたという背景がある。しかも、天の邪鬼な性格のため、どの文献についても、学界多数派によってスタンダードとされている解釈には首を傾げることが多く、「この文献は通常こういう風に読まれているが、むしろこう読んだ方がよいのではないか」ということを考える癖がついている。

自分自身にとっては、こういうスタイルで研究を進めるのが一種の個性でもあり、それはそれで一定の意味があったと考えているが、大学院生教育という観点から振り返ると、スタンダードな文献をスタンダードな解釈に沿って教えるということをしなかった(できなかった)のは、彼らにとって不親切だったということに、遅ればせながら気づいた。

それでも多くの人たちがそれぞれに個性をもった立派な研究者になってくれたのは、彼ら自身の努力のたまものであり、ありがたいことだ(立派な博士論文を書き上げた後も長いことテニユア職に就くことができず、悪戦苦闘している人が多いことには心を痛めるが、これは別の話)。

20170408

断片的な読みかじりに過ぎないが、上野千鶴子が労働移民受け入れ拡大消極論を主張したことに端を発して、これまで上野に近いと目されていた人たち(落合恵美子や北田暁だら)から強い批判の声があがり、かなり激しい論争になっているようだ。比較的近い間柄の人

たちの間で意見の違いが生じ、論争が起きるといのはよくあることで、それだけであれば特に驚くほどのことではない。だが、今回の場合、そういう一般論にとどまらない深刻な意味があるように感じられ、気になる。私自身の見識が乏しいため、立ち入った議論をすることはできないが、言いつばなしの論争に終わることなく、論争の全容と意味のようなことについてまとまった議論が提起されることを期待したい。かつて上野は『主婦論争を読む 全記録』Ⅰ・Ⅱ（勁草書房、1982年）という本を編集し、優れた解説を書いたことがあった。では、誰かが『労働移民受け入れ論争を読む』という本を編集して、きちんとした解説を書くことも期待できるのだろうか。

20170417

数年前の刊行物だが、アーヴェンとコッホ共編の『ガイダル革命』（ロシア語版 2013年、英語版 2015年）を読んだ。1990年代前半にエリツィン政権の政策決定に大きな役割を果たしたブルブリス、ガイダル、シャフライ、チュバイス、コーズィレフ等々といった面々への聞き取りをまとめた、一種のオーラル・ヒストリーの書である。編者のアーヴェンとコッホはともに「ガイダル・チーム」と称される経済学者グループの一員だが、大まかには同一陣営に属しつつも、個々の点では意見を異にすることがあり、聞き取り対象者と論争したりしている個所もある。近い間柄だけあって、「君僕」口調で話し合い、時として遠慮ない反論を試みたりしているところが面白い。聞き手も語り手たちも初期エリツィン政権を支えた人たちではあるが、エリツィンとは世代も経歴も異なり、違和感を持ちながらの協力だったことが明らかにされている点も興味深い。

中でも特に重要なのはブルブリスである。彼はソ連解体決定の立役者と目されているが、自己の見解をまとめて述べることをあまりしてこなかった（これはゴルバチョフの側近たちが概して多弁であるのと好対照をなす）。私の知る限り、ブルブリスに関する資料としては、マックス・ロイズ（ロシア出身でカナダで活躍しているジャーナリスト）による密着取材の書物が一つと、あとは新聞・雑誌での断片的な発言がいくつかある程度である。そういう中で、本書におけるブルブリスとの対話は彼の考えをかなり詳しく聞き出している。もっとも、肝心の個所で言葉を濁しているようなところもあり、隔靴搔痒の感も残るが、これはオーラル・ヒストリーの限界ということかもしれない。またもう一人の重要人物たるシャフライの発言には明らかな事実誤認ないし記憶錯誤が多数含まれ、呆れさせられた。そういった問題はあるが、とにかく一つの重要資料ではあるだろう。私自身が現在取り組んでいるのは1991年までの歴史なので、直接役に立つ個所はそれほど多くないが、1990年代を論じようとする場合には、慎重に使えば有用な資料だという気がする。

20170516

前から何となく気になっていたピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』が文庫本になったので、わりと軽い気持で読んでみた。挑発的かつ露悪趣味的な語り口だが、「読む」とはどういうことか、「本について語る」とはどういうことかを考えさせられる（左近幸村氏もいつだったかのFBでそのようなことを書いていた）。われわれの仕事の多くも、「熟読したつもりでも、どこまで理解できたか怪しい文献」とか「以前に読んだはずだが、大なり小なり忘れかけている文献」について語っているのかもしれ

ない。また、本の「意味」というものは単純にその中に書かれているというのではなく、それが置かれた種々の文脈に規定されている以上、文章を読みさえすれば分かるというものではないともいえる。著者の諧謔的・逆説的な書き方をどう受け止めるべきかには迷いが残るが、とにかく自分で考える刺激にはなる。

これは話を思い切って広げていえば、「真実とは何か」というような根本的問題にもつながり、さらにいえば、昨今話題になっている「ポスト真実」論ともつながるかもしれない。実際、ある種の政治家たちは、まさしく「読んでいない本（あるいは全然調べたことのない事柄）について堂々と語る」能力を重要な政治資源にしているように見える。

20170606

かなり前に刊行されたものだが、朴久玲『まああるものさし：くりょんのモスクワ音楽院だより』（株）ショパン、1997年という本を読んだ。

朴久玲（パク・クリョン）は2000年に「銀の時代」というCDを出していて（スクリービン、ラフマニノフ、メトネル、アレンスキー、スタンチンスキーの作品を収録）、これはだいぶ前から私の愛聴盤なのだが、弾き手がどういう人なのかについては特に関心をもつことなく過ごしてきた。最近になって、ふと関心をもって情報を探してみたところ、こういう本を出していると知り、早速古書を買って読んでみた。

朴は在日三世のコリアンで、桐朋音大在学中の1988年にモスクワに留学した。これはゴルバチョフのペレストロイカの時期で、韓ソ関係改善に伴い、政府間交換留学制度ができて、韓国籍をもつ在日の人にもソ連留学の窓が開けたということらしい（日ソ間で交換留学制度ができたのも、この前後の時期のことではなかったろうか）。彼女はそれまでもっぱらドイツ＝オーストリア楽派のものを弾いていて、ロシア音楽にはあまり関心がなく、ロシア語も全く知らなかったが、留学のチャンスができたので、急遽ロシア語を短期間勉強して、ほとんど予備知識なしにモスクワに赴いたらしい（この経過は、今回読んだ本よりも、ネット上で読めるインタビューの方が詳しい）。

モスクワ音楽院および同大学院で8年学び、その間、いくつかの国際コンクールに入賞し、本書の奥付けでは桐朋学園大学非常勤講師とあるが、その後、准教授になったようだ。1988年からモスクワに8年いたということは、まさしくソ連解体を挟む激動と混乱の時代ということになる。この本は留学中に日本の音楽雑誌に書き送っていたエッセイと、その直後に書き下ろした文章とからなっている。音楽漬けの毎日のかたわらに、ちょこっと世相観察もしてみたという感じの本で、とりたててもものすごい文才に恵まれているということでもないのに、過度な期待を懐いて読むと多少がっかりさせられる面がなくもないが、あの時代のロシアに長期間にわたって滞在した音楽家の実感的観察として興味深いものがある。

ほんの一例だが、日本のテレビでもお馴染みのピアニスト「G女史」について書かれたくだりは、一瞬「えっ」と感じさせられるが、説明を読むと、まあそういうこともあるのだろうかと思得する。そうかと思うと、がらっと趣向が変わって「ロシアトイレ事情」の章は、トイレ事情が改善する以前の時期に滞在して類似の経験をもつ人たちにとってはリアルかつ切実な話、その他その他。全体として、生活の苦しさや辛さを詳しく書く一方、なぜかそういうロシアの人々がいとおしく、ロシアが懐かしくてならないという心情がづく

られていて、共感を誘う。

教師業が忙しいせいか、最近は新しいCDを出していないようだが、そのうち「銀の時代」第2弾のようなCDが出るのを期待したい。

20170609

トランプ現象については（あるいは、一定の変更を施して日本における「安倍一強現象」についても）多くの人が語っている。仔細に見るなら多彩な議論があるのだろうが、これまでのところ私の目に触れるものは、その危険性を批判的に指摘するものが圧倒的である。そうした議論に、結論的には私も同感するのだが、何かしらそれだけでは腹にストンと落ちきらないものを感じていた。そういうなかで、『UP』（東京大学出版会）6月号に載った佐藤俊樹の文章（金成隆一『トランプ王国』書評）は興味深い指摘を含むように感じた。トランプを当選に導いた重要な支持基盤として「錆びた地帯（ラストベルト）」があるということは広く指摘されているが、佐藤は「錆びた地帯」という呼び方には「そこに住む人々もまた、「錆びた」人間たちだ」という含意がある」と指摘する。「腐食し、崩れかけ、無用となり、やがて消えゆく存在として。だから、これはやはり侮蔑語だと私は思う。でも、今日でも、侮蔑語だと意識されずに平気で使われている。何よりもそのことが、この人々が本当に「声を聞かれない」存在なのだ」と証言しているように思えた。

その先の方では、「オムニボア仮説」なる見方が紹介されて、こう説明されている。「趣味の幅広さや寛容さは、高学歴で収入も高い階層に特に多く見られる文化だという見方だ。もし本当にそうだとすれば、リベラリズムは一般的正義であるかもしれないが、特定の階級の文化でもある。リベラリズムもまた中立的な正義ではありえない」。

「もし特定の人々を「錆びた」人々だと見なすのなら、そういう扱い方が正しいことを、まず彼女ら彼らに説明する責任がある。それは彼ら彼女らの生活世界を破壊することなのだから。もし国家をこえた普遍的人権を主張するなら、「それが倫理的に正しいから」で終わるのではなく、不利益を被る先進国の有権者にも、上から目線でなく説明する責任があるだろう。他者を尊重するとは、自分とは違う存在として他者に対することなのだから。「ポピュリズム」というラベル貼りには、その説明責任（アカウントビリティ）の自覚が欠けているように思う。それを欠いたまま進められる政治は、掲げる政策がどれほど正しいものであったとしても、民主主義ではなく、啓蒙専制主義だと思う」。このように佐藤は論じている。

寛容でリベラルな価値を守りたいという感覚を私も共有するが、その価値が「高学歴で収入も高い階層に特に多く見られる文化」だとするのなら、いまわれわれは眼前にしているのは、（相対的に恵まれた社会層に属する）リベラル知識人の「啓蒙専制主義」に対する大衆の反乱ということなのだろうか？

20170615

約一週間前に「トランプ現象」や「安倍一強現象」にまつわる話題について書き込んだところ、多くの人たちから多様な反応があり、関心の高さを改めて感じた。それらの書き込みはそれぞれに興味深い示唆を含むが、私の問題提起とは噛み合わないものが多いとも感じた。もちろん、どういう事柄に強い関心を寄せるかは人それぞれだから、噛み合わない

からいけないなどと言いたいわけではない。ただとにかく、私の問題意識が十分伝わらなかったのは私の前稿が舌足らずだったせいではないかという気がするので、簡単に再論してみたい。

いうまでもなく、私はアメリカ政治の専門家でもなければ、日本政治の専門家でもない。それでも、その種の事柄に完全に無関心でいるわけにもいかないと感じ、ときおり各種解説類を読みかじって、共感したり、疑問を懐いたり、自己流に思いをめぐらしたりしている。この点をさらに掘り下げる作業はもちろん大切だが、多くの専門家が多角的に論じている領域でもあり、非専門家としては、「関心をもって見守る」という域を超えて特にオリジナルな主張をすることまで自己の課題とする必要はないだろう。

これとは別に、いわゆる識者たちが、相当説得力がある（ように見える）発言をしているのに、それがあまり広い範囲に聞き届けられず、無力なままにとどまっている現実があると思われてならない。これはアメリカ政治や日本政治に関する実体的分析とは異なったレベルの問題だが（いわば認識対象ではなく、認識主体の側の問題）、これは同業者（社会科学の研究に携わる人間）の状況に関わるので、私にとってはこちらの方が他人事ではなく、切実な問題と感じられる。

識者とか知識人といってもいろんな人が含まれるが、私の目に触れる範囲の言説は、どちらかという、大まかな意味でリベラルな傾向のものが多い。たとえば、自己と異なる他者の存在を認め、そうした他者の理解、寛容、共生などが重要だとして、それが損なわれかねない状況に憂慮の念を表明するといった感じの議論である。こうした言説の内容は、個々の具体的論点の正確さはともかく、基本的発想としては妥当なものと感じるが、それでもそうした言説が無力なものにとどまっているという現実があるようにみえる。そうだとしたら、「自分たちは正しいことを言っている。それを理解しない連中が悪いのだ」という（半ば無意識の）自己満足——それはまた、暗黙のうちにもせよ、そうした言説に耳を傾けようとしない人たちへの軽侮の念を伴っている——だけで済ますわけにはいかないのではないか。

知識人というのはもともと無力な存在なのかもしれない。だが、財力や政治権力とは異なる「知的権威」のようなものが知識人にはあるというイメージがかつてはあったし、その残像は今でも完全に消えてはいないだろう。しかし、現在では、それがますます低下しているばかりか、そうした「権威」に訴えようとする姿勢自体にも懐疑や反撥が向けられているのではないだろうか。「知的権威」というものは、露骨に金や力を振り回すのに比べれば尊重に値するものだというのも一つの考え方ではある。しかし、それが「権威」の一種であるからには、そうした権威を持たない人々の目から見れば、疎ましい抑圧的なもの（いわゆる「上から目線」）と映る可能性がある。知識人が「正論」を説くときに、しばしば忘れられているのはその点ではないだろうか。

だからどうすべきだという名案があるわけではない。ただとにかく、自分たちの置かれた状況をしっかり見つめることなく、「自分たちは正しいことを言っているんだ」という確信から、無意識にもせよ「上から目線」的な——少なくとも、他者からそのように受け取られる——発言を続けるなら、ますます孤立を深めるのではないだろうか。

20170621

イエジ・J・ヴィアトル「選択に直面する選挙後の左翼」 1・2 『ロシア・ユーラシアの経済と社会』2017年3月号、4月号。

現代のポーランドが右派ナショナリスト政権の「暴走」的な振る舞いで立憲主義の危機が懸念されるという、現代日本を彷彿とさせる状況にあることはマスコミ報道でもときおり伝えられることがあり、ある程度まで知られているだろう。だが、かつてポーランドが「改革の先頭走者」と呼ばれ、「ヨーロッパへの回帰」を果たしたはずなのに、まさにEU加盟の前後から右派の台頭が進み、現在に至るようになったのはどうしてかという問いに取り組んだ議論は、私の目に入る範囲ではあまり多くない。それだけではない。敢えて厳密さにこだわらず大風呂敷を広げていうなら、伝統的政党（例えば穏健保守党や社民政党など）の退潮と右翼ポピュリスト勢力の伸張、立憲主義あるいはリベラリズムの危機といった現象は、具体的状況はさまざまであるにしても、ヨーロッパの他の諸国でも、アメリカや日本でも取り沙汰されている。としたら、ポーランドの事例は特異な「逸脱」とか「遅れ」といった言葉で片付けられるものではなく、欧米や日本を含んだ他国との比較の視座の中におかれてよいように思われる。

今回読んだ論文の筆者ヴィアトルは、ポーランドを代表するというだけでなく国際的にも著名な政治学者である。もともと、1931年生まれで、かなり以前から活躍していた人なので、私などは何となく「過去の人」のようなイメージをもっていたのだが、その彼が今なお健筆を振っているというのはちょっとした驚きだった。論文の主眼は、壊滅的敗北を被ったポーランドの左翼について、その敗因を分析し、再生の道筋を考えることにおかれている。ここでいう「左翼」とは、出自としてはかつての共産党（統一労働者党）の系譜を引くが、基本的に社会民主主義の立場に立ち、名称変更や政党再編を重ねながら今日に至っている勢力を指す（現代において「社会民主主義」とは何を意味するのかという問題もあるが、ここではひとまずおく）。このポーランド左翼は、1989年の体制転換から十数年ほどの間はそれなりに大きな位置を政界に占めていたが、2000年代半ば以降、大きな後退を重ね、遂には国会で一議席もとれないところにまで落ち込んだ。こうした左翼の大後退は、右派ポピュリスト勢力の急伸長と表裏一体をなしている。

ヴィアトルの分析が十全なものかどうかを判定することは私にはできないが、社会民主主義支持の立場に立ちながら、その壊滅的敗北をきちんと見つめるところから出発しなくてはならないとする議論は、ともかくも一読に値するものと感じた。そして、上に書いたように、大なり小なり類似する状況が他国にもあるとしたら、これは特定地域専門家だけの関心事ではなく、より広い討論の素材となつてよいのではないかとも感じた。掲載誌がやや特殊であるため、あまり多くの人の目にとまらないかもしれないが、ポーランドあるいは隣接諸国という枠を超えて、世界各国の現代政治の分析に携わる人たちの間で広く論じられてよいのではないかと思ひ、敢えて勝手な宣伝を試みた次第。

付記。冒頭で現代ポーランド政治に関する分析が乏しいと書いたが、私の知る範囲では、小森田秋夫、仙石学の両氏がそれぞれ興味深い論文を書いている（小森田氏はヴィアトル論文の訳者でもある）。